連載 関係からみた子どものこころと育ち

第12回

前思春期の女児にみられる拒食と甘えのアンビバレンス

小林　隆児　Kobayashi Ryuji　大正大学人間学部臨床心理学科教授，くじらホスピタル

拒食とやせを主訴とした11歳の女児

L子：11歳，小学５年生。

主訴：拒食とやせ。

家族背景：父親(会社員)，母親(専業主婦)と小学校低学年の弟２人との５人家族。弟は２人とも幼児期から落ち着きのない子どもで，いまでも発達の問題を抱えている。そのため母親は２人の相手で毎日が大変だという。

現病歴：乳幼児期では，身体運動発達上とくに問題はなかった。幼児期から非常におとなしく，子どもたちの中に入って遊ぶことのきわめて少ない子どもだった。母親の言うことはとてもよく聞き，手のかからない子どもだった。

小学校入学当時，集団の中での緊張のためか一時的に食べられなくなってやせたことがあったが，その後は比較的大きな問題もなく順調であった。

小学５年になってクラスが変更になり，友達と担任が変わった。するとしだいに食事が摂れなくなってきた。朝食は少ししか食べられず，学校給食はまったく食べられなくなった。最初のうちは，夕食だけはしっかり食べていたが，それも急速に減っていった。ついにビスケット１個だけしか口に入れなくなった。

食べなくてはいけないという思いは強いようだが，食べるとその後に罪悪感が強まり，胃が痛むと訴える。食べると元気になって動き回ってしまう。食べなければよかったという気持ちになりやすい。母親が理由を尋ねても，直接話をすることが難しい様子なので，母子の間でメモをやりとりし，コミュニケーションをとるようにしているという。

もともとストレスを抱え込みやすく，警戒心が強い。心配性であるが，その一方では粘り強く，がまん強い子どもである。

L子は下の弟をとてもかわいがっていて，家の手伝いもよくしているという。あまりにもなんでも手伝おうとするので，母親は休みの日だけでかまわないから，ほかの日は勉強でもしなさいと言うが，どうしても自分からやると言い張り，こちらの言うことをきかない。家事全般なんでもやろうとする。そんなL子を見ていると，母親の手伝いをせずにおれないような，どこか切羽詰まった息苦しさを感じるという。自発的というよりも，せずにはおれない感じだという。そのため手伝ってもらっても，うれしさよりも心配が募るという。

数週間前より，夜も眠れなくなった。食事をしていなくても朝から動き回っている。標準体重より10kgほど減少している。やせ願望というよりも大きくなるのが怖いという気持ちが強い。

初診時の状態：いまだ幼さを残した小柄な女児で，口数は少なく，うつむき加減で視線をこちらに向けることも少ない。質問にも必要最小限のことしか答えず，いつも母親のほうに視線を向けて，母親が代わりに答えてくれるのを待っている様子である。食べることをめぐって強いアンビバレンスが認められ，標準体重の25%ほどのやせである。母親には依存的で，反発的態度は認められない。母親の手伝いをさかんにしているが，そこには強迫性が認められ，痛々しい感じを受ける。

臨床診断：前思春期に発症した摂食障碍(拒食症)。

治療方針：薬物(抗精神病薬リスパダール®２mg/日)を処方し，母子同席面接で治療を開始した。

治療経過

●第2回(初診日から1週間後)

薬の効果も相まってか，不安がやや軽減し，間食の類を少しずつ食べられるようになってきた。水分摂取も自分からするようになってきた。

朝，起きるとじっとしていられないので，外に出て1～2時間，ずっと歩き続ける。勝手に動き回りたくなってしまうらしい。家の中でも階段の昇降を繰り返す。L子自身は片づけものをしているだけだと言うが，母親にはそう見えない。繰り返さずにはいられない状態のようだという。

母親の話によれば，L子はメモにとても小さな文字で，「お母さんごめんね，つらい，死にたい，食べられない」などと書いているという。

これまでの親子関係について

母親はこれまでの親子関係を振り返って次のように語った。

父親も口数が少なく，何を考えているかわかりづらいところがあるが，そんなところがとても似ていると思う。父親は優しい，頑固，意志を曲げない人。L子は父親とは話さなくても意思疎通がうまくいっているという。父親は口癖のように，「「～してほしい」と言ったよね」と私に言う。私に対して常々何度も言っているのに，通じないという思いがあるようだが，自分は言われた記憶はない。この子にも同じような思いがあるのではないか。自分は忘れっぽく，楽観的な性格だが，L子がこんなことになってから，L子の話をもっと大切にして聞いてやらねばと思うようになった。何かこちらに要求があっても強く主張することはなく，父親もL子もさらっと言ってしまうので，そのことに気づかないことが多かったのではないかと反省している。

L子は実家の祖母に会うと，いつも母親のことばかり話すらしい。昔，食事を摂れなかったとき，氷を口の中に入れてくれたことなど，母親が自分に優しくしてくれたことを語っているという。

L子の母親に対する微妙な態度

母子同席の面接で，L子は筆者の質問に対して相変わらず言葉少なで，母親が代わりに答えてくれるのを待っている様子だったが，筆者は次のようなことが気になった。

これほど母親に頼っているにもかかわらず，母親が話し始めると，母親のほうに視線を向けることなく，ことさら(90°の角度で座っている)母親とは反対側に目をやっていることが多い。母親が話すのを聞いてはいるが，母親の目を見ていない。そのときの表情がとても硬く，笑顔はほとんど見られない。時に母親の話を聞いていて，にこりと笑みを浮かべることはあるが，なんとなく作り笑いのように見える。母親の話から想像するL子の母親への思いと，面接場面で見せるこのような態度を見ていると，母親に対するかなり屈折した思いがあることが推測された。ただ，このときはそのことを面接のなかで直接取り上げることは控えた。

●第3回(2週間後)

L子は学校に行きたいと言うが，登校は午前中のみで精一杯の状態であった。昼，保健室で食事は少し摂った。

自分の頭の中に自分じゃない人がいる。悪い奴で，その人が自分にご飯を食べるなと言う。だから食べると嫌悪感が起こる。…自分の意思ではないものが自分になにかいやなことをする，いやな感情を駆り立てると母親に訴えている。そして，「怖くはないけど。でもいやだ」とも言っている。深刻な自我障碍を思わせる状態であるためか，母親に直接口で訴えたり，助けを求めることはない。相変わらずメモに書いて訴えている。その主な内容を以下に記す。

メモに記したL子の苦悩

…薬を飲んで，そのあと食べると，こんどは食べることばかり考えてしまいます。体重のことはがんばってあまり気にしないようにしていますが，(どうしても)このことも考えてしまい，いつも重苦しく食事をしている感じで，とってもつらいです。学校は勉強だけがすきで，あとは全部きらいです。でもこのように打ち明けられるだけよくなったかんじもします。そして，どうしたらママみたいに楽にしょくじ(食事)ができるか教えてください。いつも本当にありがとう。ママのことが大好き。おへんじ(返事)まってま～す。

…

【大好きなママへ】私はいま生きていることがいやです。これは正直に思っていることをかきました。もうなにもかもいやです。自分が大嫌いだから。自分をほめたくない。どこもかしこもわる

いところだらけ。ほんとうにいやでいやでたまりません。自分が大嫌いだから兄弟と話すのもいや。もうだれとも話したくない。ママ以外の人とは話したくないくらい，おり(檻)の中でくらしたい気分です。人間はみんなさべつ(差別)だと思います。人間はみんなふかんぜん(不完全)だけど，そんなにつらくなく生きている人もいるし，くるしいなか生きている人もいるからです。すべてがいやですが，そのなかでもいやなのは食事で，体重がふえることです。体重計には乗っていないけど，だいたいのよそくがつきます。体重がふえると自分を殺したい気持ちになるから，いくらおいしそうでも，食べたくても，食べません。許してね。殺したくなる気分よりはましです。本当にゴメンネ。なんかみんなが大好きなのにいっしょにいるとイライラします。ママは平気だけど。私の正直な気持ちです。

内面から突き上げてくる衝動に圧倒される

これまで親からの期待に応えることで懸命になって生きてきた自我理想の高い子であったのであろうが，自分を表に出すことが難しく，そのため自分の思いを母親に受け止めてもらうことが少なかったのか，しだいに自分のなかに漠とした欲動(衝動)が突き上げてくるようになり，それに圧倒され始めて，このままいい子として振る舞うことができなくなってきたのであろう。いまだ意識にのぼってはいないために，母親へのあからさまな反発は見せていないが，面接場面での母親へのさりげない態度には，母親に対するアンビバレントな感情が強まっていることがうかがわれる。母親の期待に応えなければという思いと，それに抗するような思いの狭間で苦しんでいる姿である。L子のなかではそのような内面の変化が，このメモに記された苦悩として表現されているように思われるのである。

●第4回(3週間後)

薬を服用するようになってから，気温の変化に敏感になった。食事はかなり摂れるようになってきた。しかし，体重が増えてひどいショックを受けた。

母親は，この子は話すことがストレスになっているみたいだと気づいた。しゃべることがいやみたい。自分に積極的にかかわられるのがいやみたいだ。あまりかかわられないほうが安心できるようだから，こちらからいろいろと口をはさむことをしないように心がけるようになったという。

●第5回(4週間後)

食べることへの罪悪感が強いのか，よく泣くようになった。朝からしくしく泣いている。夕方も涙を流して泣いている。母親に夜一緒に寝てほしいと要求し，以前よりもよく泣くようになってきた。

食事の量は増えているが，自分からは食事を摂ろうとしない。父親や母親が手を貸してやって食べさせると，それがきっかけで食べるようになる。

前回，体重が増加したことがひどくショックだったようだ。そのため薬を積極的に飲まなくなった。薬を飲むと食べられるようになるという怖さがある。大人になりたくないという気持ちが強い。

筆者はL子に「薬を飲んでくださいね」とこちらからお願いしたが，母親には自分から積極的に相手をしなくてもよいと伝えた。なぜなら，母親からの接近がいまのL子にはかなり侵入的に映っているきらいがあると判断していたからである。

幼児期のL子

小さいころの話が母親の口から語られた。公園でも他児の遊びを離れてぼうっと見ているだけで，自分からは遊ぼうとしない，おとなしい子どもだった。

2歳になったときに弟が生まれた。それまで母親にはよくおしゃべりをしていた。母親は弟に手がとられるようになって，L子に手をかけられなくなった。そのためであろうか，L子はしっかりしなくてはという思いがとても強くなり，姉らしく振る舞うようになった。

●第6回(5週間後)

この1週間は調子がよく，学校にも行った。弁当も持参してよく食べた。朝起きても泣かなくなった。薬には抵抗があるが，1週間分を全部飲んだ。食べた後の罪悪感は10から3に減ったという。

母親は干渉することをやめた。母親自身「私の大変さ」がこの子に影響していることがよくわかった。私にストレスのないことがこの子のストレスのなさにつながっていると思う。

母親はL子との会話のなかで，次のようなことに気づいたという。L子に対して母親が「何を食べたい？」と直接問くと身構えてしまう。しかし，「これはママが食べたいな」と言うと，L子も食

べたがる。夫にも同じ傾向があることを思い出したという。

天の邪鬼

ここに示されたL子の心性は，まさに「天の邪鬼」そのものである。「天の邪鬼」とはわざと人の言に逆らって，片意地を通す者を指すが，このような心性はこれまで筆者が一貫して取り上げてきた「甘えをめぐるアンビバレンス」を端的に示している。この母子関係において，このようなアンビバレンスが強くはたらいていることが，L子の深刻な病態に深く関係しているということである。

面接場面で認められたL子のアンビバレンス

前述したようなことが母親の口から語られた面接のなかで，筆者は非常に興味深いことに気づいた。

L子に対して直接顔を向けて，「調子はどう？」と尋ねると，すぐに母親のほうに視線を向けて代わりに答えてもらいたそうにする。そして自分からは何も答えようとしない。しかし，母親に向かって筆者が「お母さんにずいぶんと頼っているよね」と尋ねると，母親が反応する前に，L子は強く何度も頷いて答えていたのである。

ここにみられたL子の反応は，母親の語ったL子の姿と重なり合うものであったので，このことをすぐに筆者は取り上げた。L子は母親にとても頼っているが，その一方で自分を主張したい思いも強まっているのであろう，そのようなこころの変化がこのような形で表れているのではないかと説明するとともに，このような気持ちはとても自然なことで，なんら自分を責める必要はないことを強調しておいた。いま現在のなまなましい自分たちの気持ちのありように対する筆者の説明を聞いて，母子とも腑に落ちたような表情を浮かべて頷いているのが印象的であった。

●第7回（7週間後）

前回の面接で，L子のアンビバレンスはかなり緩和したのであろう。診察室に入ってきたL子の表情にそれまでの委縮した感じが薄れているのを筆者は感じ取り，自分のことを話したい気持ちが強まっているのではないかとの判断から，母子2人に挨拶をしたとき，最初に1対1で話をしようかと提案すると，L子はいやな顔一つせず，母親の退室後も1人残って椅子に座った。そしてL子は次のようなことを語り始めた。

自分はみんなより話さないと思う。友達もあまりいない。1人でいるのはそれほど好きじゃないけど，2人でいてもあまり話さない。母親がそばにいると，どうしても母親が（先に自分のことを）言ってくれる。たまに違ったことを母親が言うこともあるかもしれないが…。心配が少し減った。食べると太ることは以前みたいに考えない。いま考えると，なぜあんなことを考えたんだろうと思うという。

母親の内省

その後，母親にも入室してもらい，話を聞いた。この子と接するときにはどうしても急かせていた。つい口を出していた。3人も子どもがいるので。いまはできるだけ言わない，急かさないようにしている。食べることについても言わないことにした。私を頼っているところがいまでもあるけど，その一方，自分でなんでもしたいという自立の気持ちもあるみたいだと気づくようになったという。

子どもの悲しみと母親の悲しみ

一時期，よく泣いていたが，いまは減った。ほかのきょうだいからL子のことをずるいと非難されるのがつらいみたい。（母親に対する甘えをめぐっての）葛藤のために泣いていたと思う。泣くことによって，これまでのつらかった思いを消化しているみたいだ。

L子は少し元気になって学校に行き始めたが，すると私（母親）が泣くようになった。自分の母親（L子の祖母）に，「子どもが食べないときに，母親がよく平気で食べられるね」と責められた。それでことさら私は食べることにしていた。気丈に振る舞っていた。母親に対するそんな思い（自分の母親に対する反抗）がこの子をこのようにしたのではという気持ち（罪悪感）が起こって，今度は自分が泣きたくなってきた。自分は無理して気丈に振る舞っていた。L子を不安にさせてはいけないと思ってやったことだが…と率直にいまの思いを語るのだった。

母親自身のアンビバレンスの背景にあるもの

L子の涙は母親に対するアンビバレンスの苦悩を癒すはたらきを担ってくれたのであるが，筆者のこころに強く響いたのは，L

子が立ち直り始めるとそれに代わって，母親自身が自分の母親に対して抱いていた反抗的な態度(アンビバレンス)に気づき，涙を流すようになっていったことである。

筆者は母親自身の子ども時代について話を聞いていった。そのなかで浮かび上がってきたのは，自分も前思春期のこの時期に同じように非常につらい思いを体験していた事実であった。そのころ母親は再婚したため，居づらくなって，成人になる前に家を出てしまったというのである。そのときの母親への恨みや寂しさが今回の娘の発症によって甦り，なぜか自分の母親に反抗的な態度をとらずにはいられなかったのであろう。そのことがL子の不安をさらに強めることにつながっていたことに母親自身気づいたのである。

第13回　日本地域看護学会学術集会

■日　時：2010年７月10日(土)，７月11日(日)
■会　場：北海道立道民活動センター　かでる２・７
札幌市中央区北２条西７丁目
(JR札幌駅南口から徒歩10分)
■内　容：
会長講演，理事会セミナー，シンポジウム，教育講演，市民公開講座，一般演題，ワークショップ
■参加費：
学会員　2010年５月21日以前の申し込み：8,000円
2010年５月22日以降の申し込み：9,000円
非学会員　時期にかかわらず：9,000円
学生　大学院生を除く：4,000円
■参加申込方法：
日本地域看護学会第13回学術集会ホームページ(http://www.ec-pro.co.jp/jachn13)の「参加申し込み」画面にてき，オンラインによるご登録をお願いします。オンライン登録後，銀行または郵便局にてお振込みください

	オンライン登録締切日	入金最終締切日
早期事前申し込み	2010年５月21日(金)	５月31日(月)
事前申し込み	2010年６月18日(金)	６月30日(水)

＊６月18日以降は学会当日の受付となります

【銀行】
銀行名　北洋銀行　北七条支店
口座番号　3929079
加入者名　日本地域看護学会第13回学術集会
【郵便局】
口座番号　02750-2-100506
加入者名　日本地域看護学会第13回学術集会
フリガナ　ニホンチイキカンゴガッカイダイジュウサンカイガクシ
■問い合わせ先：
【運営事務局】
〒060-0003　北海道札幌市中央区北３条西３丁目
名鉄観光サービス株式会社札幌支店
「日本地域看護学会第13回学術集会係」
URL：http://www.ec-pro.co.jp/jachn13
E-mail：jachn13-gakkai@ec-pro.co.jp
【日本地域看護学会第13回学術集会事務局】
〒060-0812　北海道札幌市北区北12条西５丁目
北海道大学大学院保健科学研究院
E-mail：jachn13-gakkai@ec-pro.co.jp
FAX：011-706-3695